
ORCA

wan

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

O R C A

【Nコード】

N 3 3 5 2 D

【作者名】

w a n

【あらすじ】

天賦の才を持つ孤独な少年ギタリスト、一之瀬誠^{かい}。一人の少女との再会が、彼の運命を大きく変えていくことになる。

第1話 JONASAN

ギユイイイイン!!

荒々しいユニゾンチョーキングが「JONASAN」に響き渡る。少年の指からほとばしる音は、美しくもどこか儚い。

「JONASAN」の客はそんなギターの音色に酔いしれていた。その漆黒のギターのヘッドには「ORCA」と彫られていた。

第1話 JONASAN

「おう、誠、今日もいいブルースだったぜ。」

JONASANの常連のひとりの中年の男が、セッションを終えカウンターに戻った誠に声をかけた。

ここ、「JONASAN」はワインやウイスキー、バーボン、カクテルなどの洋酒を主に扱うバーで、アマチュアのブルースマンたちによるセッションの場としても知られている。

「ああ、どうも・・・」

誠はカウンターでワイングラスを拭きながらぼそつと答えた。その瞳は青かった。

彼の名は一之瀬誠（かい）。

明日、市内の桜ヶ丘高校に入学する予定、つまり明日から高校1年生だ。

背は180cm近くあるだろうか。

猛獣のような鋭い眼光が特徴的で、欧米人のような青い瞳をしている。

すっと伸びた高い鼻筋や、意思の強さを思わせる唇。ブルーに輝く瞳も相まって、顔の造りはギリシヤ彫刻を思わせるようだ。

がっちりした体躯で、Ｔシャツの上からでも、胸板が厚いのが目に付く。半袖から覗く腕も太かった。

「相変わらずぶっきらぼうだなあ、お前。そんなんじゃ客も怖がるだろ。」

中年の男はバーボンを煽りながらにやにやした顔で冷やかした。

彼が言うように事実、誠の鋭い眼光や威圧的な態度を怖がり、それつきり来なくなった客もいるのだ。

「別に・・・これが普通なんだけどさ・・・。」

先ほど同じようにぼそつと誠は答えた。

「まあまあ、加藤さん。誠くん、それでも良くやってくれてるんですよ。」

良く働いてくれるし、頭の回転も早い。常連さんには結構評判いいんですよ。

なんてったってギターの腕前は素晴らしいしね。」

穏やかな口調で常連の男に言ったのはJONASANのマスター、
「佐伯一郎」であった。

彼は長年の夢であったブルースバー、JONASANを2年前に立ち上げ、そのおおらかな人柄と、
低めに抑えた価格、卓越したカクテル作りの技術が人気を博し、今

では多くの常連客に恵まれている。

またマスター自身もかつてはブルースバンドでベースを担当していたらしく、他のブルースマンたちのために

セッションの場を設けたい、との意向で、JONASANでは毎日のようにブルースが鳴り響いている。

そして誠はJONASANのウェイターであり、セッションギターストのひとりでもあった。

彼の正確無比なリズム感、圧倒的なファストピッキング、扇情的なチョーキングやヴィブラートは若干15歳とは思えないプレイであり、JONASANの中でもそのテクニク、インプロヴァイズセンスは際立っていた。

「へっ、マスターもホント人がいいよねえ……。ま、こいつのギターは確かに認めざるを得ないけどね。」

加藤はそう言うに残りのバーボンを一気に飲み干した。

「じゃ、誠のセッションも見たし、そろそろおいとましましょうかね。」

マスター、お勘定ここに置いとくわ。ほんじゃ、またな誠。」

「あ、はい、また・・・」

「ぶっ、ほんとぶつきらばうなやつ。」

店のドアを開け、振り返って手を上げて帰っていった加藤の顔は、どこか嬉しそうだった。

「マスター、店内の掃除終わったよ。」

「ああ、ご苦労さん。今日はもう終わりだ。いつもの飲むだろ？」

「ああ、飲む。」

マスターは氷をいれたグラスを二つ用意し、ジャックダニエルを注いでいる。

店内にはもう客はいないため、二人の会話がレンガ造りの室内に反響する。

誠はこの閉店後のひとときが好きだった。

「うまい・・・。」

「相変わらずいい飲みっぷりだね。そんなに好きかい？ジャック。」

「うん。こいつが一番いい。」

誠はカラン、とグラスの氷を鳴らした。

ジャックダニエルはアメリカのテネシー州産のウイスキーで、その独特な香りと焼けるようでフルーティーな後味が特徴である。

誠はまだ15歳にもかかわらず、大の酒好きであり、特にウイスキーには目がなかった。

その中でもとりわけジャックダニエルを愛しているのだ。

マスターは未成年の誠が飲酒することに最初は驚いたが、とやかく注意することはしなかった。

彼の送ってきた人生を考えれば、酒は唯一の逃げ場所なのかもしれない、と考えていた。

「それにしても、誠くんがここでバイトするようになってもう二ヶ月か・・・。」

「今でも初めて君と会ったときのことを思い出すよ。」

マスターはジャックの入ったグラスを見つめながら続けた。

「なあ、君はプロになるつもりはないのか？」

「ないよ。音楽で飯食ってくなんて、俺にはできそうもない。」

「君ほどのギタリストなんてちょっとやそつといるもんじゃないだろう。」

少なくとも私の出会った中では君以上のギタリストはいなかった。

「

「巧けりゃプロになれるってわけでもないでしょ。」

「そりゃあそうだけど。」

「俺にはこうやってバーでほそぼそとセッションしてる方が性に合ってるよ。」

チップくれるお客もいるし。悪くない。」

「もったいないな。」

そう言つてマスターはこの話題を切り上げることにした。

初心者に毛が生えたようなレベルのバンドが、安っぽい恋愛ソングを歌つてオリコンチャートを賑わせている今日の音楽業界において、誠のような本物のギタリストにこそプロで活躍してほしいと思うが、本人にその気がないのなら仕方がない。マスターはそう思った。

「明日から高校生か。君も楽しみだろう？」

「別に……」

「どうして？友達だって沢山できるし、恋愛だってするだろう。青春じゃないか。」

恋愛といえばね、実はこう見えて私は昔結構モテたんだよ。学園祭でエルビスプレスリーのコピーバンドをやったね。

その学園祭以来女の子たちからの注目の的さ。ああ、私も高校生に戻りたいよ。」

「別に・・・友達なんていらない。俺は一人で生きていける。」

「誠くん・・・」

「俺には、コイツがあれば、それでいい。」

お先です、と言って誠はハードケースに包まれたギターを手に取り立ち上がった。

その背中には、15歳の少年とは思えない、悲しい背中だった。

第2話 再会

ピピピ ピピピ ピピピ ピピピ

一日の始まりを告げる無機質な音。

その20回目のコールで誠は目を覚ました。

「あんまり眠れなかったな・・・」

そうばやきながら彼はベッドから身を乗り出した。

彼はあまり朝に強い方ではない。というか弱い。

そのため朝はすこぶる機嫌が悪いので、もとの鋭い眼光が不機嫌なためさらに鋭くなる。

彼はおもむろに冷蔵庫に向かいパンと牛乳を取り出すと、パンは焼くことなく、

牛乳はコップによそることなくそのままラッパ飲みしだした。

誠の住んでいるアパートは桜ヶ丘高校まで歩いて15分ほどの場所に位置しており、

大きな通りからは離れているため昼間でも静かだ。

見た目はボロく、中身もやつぱりボロい。家賃2万円で風呂も付いているのだから

ボロくて結構、と誠は気にしてはいなかった。

台所も付いているには付いているが誠にはあってもなくても同じことだった。

彼は全く料理をしないからだ。

小学生のころに、「これからは男も料理ができなきゃダメ」と半ば無理やり包丁を持たされた

ことがあったが、何度やっても上手くはならなかった。それに料理の楽しさというものが理解できなかった。それ以来、飯は作るためにあるんじゃない、食うためにあるというのが彼の持論になってしまった。

朝食を食べ終わると時計の針は8時15分を示していた。

「そろそろいくか・・・。」

第2話 再会

桜ヶ丘高校に着くと、正面玄関前は多くの新入生でごったがえしており、ここに着くまでにアパートからずっと上り坂を歩いてきたせいもあってか誠はイライラを隠せなかった。

さっさと自分のクラスを確認してこの場を離れようと、彼はクラス振り分けの掲示板へと近づいた。

（えっと・・・俺はC組か・・・ん？）

自分の名が印字されているすぐ横の、「井坂詩音」という四文字が目に入った。

（井坂詩音・・・まさかな。）

掲示板のとおり誠が1年C組の教室のドアを開けると既に半分くらいの生徒が集まっていた。

こんなに大勢の人間との共同生活なんて何年ぶりだろう、と思いなから黒板に書かれた席順にしたがって席に着いた。

彼の席は窓際の一番後ろの席だった。

「おー久しぶりだな！同じクラスになれて良かったよ。」

「俺、斉藤。これからよろしくな！」

そんな会話を嫌でも聞かされているうちに、彼は昨日マスターに言ったことを思い出していた。

友達なんていない。俺は一人で生きていける

自分の気持ちに嘘はない。俺は誰にも頼らない。人は、信用しちゃダメなんだ。

「誠ちゃん・・・？」

誠がそんなことを考えていると、ふと頭上から女の柔らかい声がした。

「・・・？」

「私、詩音。覚えてない？泉の小学校の。」

「・・・泉の小の詩音・・・？」

誠は目の前で立っている女と黒板の席順を交互に見つめた。

そこには確かに数年前には見慣れていた金色のストレートヘアと、淡く緑色に輝く少し目尻の垂れた優しい瞳があった。

「井坂詩音って、お前だったのか」

「ああ、覚えててくれたたのね。ホントに久しぶりね。誠ちゃんも桜ヶ丘高に入学してたなんてびっくりしちゃった！それに同じクラスだなんて。」

そついうと詩音は誠の隣の席に腰掛けると上着を椅子の背中に掛けた。

「ってなんでお前そこに座るんだ？」

「？なんでって私の席ここだもん」

「え・・・？」

一瞬絶句して誠はもう一度黒板を凝視した。確かに一之瀬誠の隣に井坂詩音と書かれている。

（最悪だ・・・）

彼の顔が思いつきり歪む。高校では誰とも関わらずにいたいと思っていたのに、詩音が隣だとは・・・

「ねえ、すごい怖い顔してるよ・・・？具合でも悪いの？」

詩音は少し心配そうに誠の顔を覗き込んだ。

「何でもない。もともとこういう顔なんだよ。」

「そうだったっけ？昔はもう少し可愛げのある顔だったような気がするけど。」

でも、目が青いのは変わってないね。」

（この女・・・人の気にしていることを・・・）

彼は自分の目が青いことを気にしていた。その青い目はアメリカ人とのハーフである母親から受け継いだものだった。

しかしそのせいで小学校時代、「ガイジン」と格好のイジメの的となったことも事実であった。

「お前だつて緑色だろうが。」

「うん。でももう氣にしていなよ。これも自分の個性の一つとして考えればいいかなつて。」

緑色、とは詩音の瞳の色のことである。

彼女も母親がフィンランド人のハーフであり、その瞳の色と金色の髪を継承したのだ。

そして誠同様に彼女もイジメの的となったことが、皮肉にも彼らの仲を深めることとなつたのだ。

「ふーん。強いな、お前は・・・。」

誠は窓の外の桜の木を眺めながらつぶやいた。

詩音は変わった。俺は、どうなのだろう。ある意味、変わってしまったのかもしれない。

「ねえ、誠ちゃん、この3年間どうしてたの？その・・・おじさんとおばさんが亡くなつてから、誠ちゃんこの町から出て行っちゃったでしょう？あれから連絡もなかったから心配してたのよ？」

「うるさいな・・・黙れよ。」

「えっ・・・」

予期していない返答だったのか、彼女は凍りついたように固まってしまった。

「もう過去のこととは触れないでくれ。頼むから・・・。」

「誠ちゃん・・・」

二人は再び出会った。まるで神のいたずらかのように。

第3話 誠と詩音

「なあ、これからみんなでカラオケいかない？」

「お、いいねえ。C組の初コンパといこうぜ！」

「あたしミスチル歌おうかな！」

「じゃあ俺アジカン歌うわ！」

入学式が終わり、そろそろと生徒たちが帰宅する中で、C組の教室には早速これから遊びに行く計画を立てている者もいる。

中には「あの娘かわいい」「あの人かっこよくない？」などと色めいた話をする輩もいる始末だ。

「あの井坂詩音って子、すげえ可愛くない？あの金髪って地毛だよな？マジ可愛いんだけど。」

早くこの場を去ろうと誠は足早に教室を出ようとしていたが、詩音という言葉を耳にしてその場で立ち止まってしまった。

「確かに芸能人みたいだよな！目も緑色だったし、ハーフなのかな？マジ付き合いてえ！」

（そうか。詩音は他の男からはそういう目で見られてるんだな。）
詩音の容姿はC組ではズバ抜けていた。おそらくこの学園中でもトップクラスに入るだろう。

意思と優しさを感じさせる、大きくて澄んだ緑色の瞳。ぷるんとして柔らかかそうな少し小さめの唇。華奢な体形のわりには大きく膨らんだ胸。

確かに男子生徒を引き付けるには十分に魅力的な要素がそろっている。

そんなことを考えていると、先ほど詩音の容姿について会話していた男子生徒たちが話題を変えたことに彼は気づいた。

「ってかあの窓際が一番後ろに座ってるやつ、マジム力つくんだけど。ぜってーガンとばしてるよアイツ。」

「あー、すっげー目つき悪いよなアイツ。今度シメるか?」

アハハハ、と男子生徒たちの下品な笑い声が聞こえてくる。どうやら誠が教室内にいることに気づいていないらしい。

（俺にはどうやら人に嫌われる才能があるみたいだな・・・詩音とはえらい違いだ。）

ふっと口元に笑みを浮かべて誠はそのまま教室をあとにした。

第3話 誠と詩音

詩音とはあれから一言も話さなかった。彼女の方は何か言いたげな顔をしていたが、誠は無視していた。

彼女との再会を恐れたのは、彼女が俺の過去に触れる可能性のある唯一の人物だったからだ。

一之瀬誠と井坂詩音は小学校1年生の時に出会った。

既にその頃から二人へのイジメは始まっていたため、自然と彼らは行動を共にするようになっていた。

そうすることが自分たちの傷を舐め合うことになる、と幼いながら考えていたのかもしれない。

（ねえ誠ちゃん。わたしたちってガイジンなの・・・?）

（違う。オレたちは・・・ガイジンじゃない。目の色がみんなと少し違うだけじゃないか。）

（でもわたしの髪の色、金色だよ・・・?みんなは黒いのに・・・。）

（オ、オレは黒より金色のほうが好きだ。）

（えっ・・・?）

小学校3年生のとき、クラスの中心的存在であつた女子生徒が詩音の金色の髪を切り落とした事件が起こつた。

（いやっ！やめて！痛いっ！）

（ガイジンのくせに学校に来てるんじゃないよ！

ねえ、みんな。この金色の髪、チカチカして超ウザイと思わない？）

（ウザイウザイ！マジ何様ってカンジ〜。）

（じゃあみんなの意見を尊重して、このウザイ髪切っちゃおうと思
うんだけど、どう！？）

（えっ、やっ、やめて！）

（さんせ〜い！！）

（切っちゃえ切っちゃえ〜！！）

（じゃあいくよ〜！せーのっ！）

（やめてえええ！）

バサッ

（うつ、うつ、・・・）

（おい詩音、どうした？・・・ってお前どうしたんだよその髪！？）

（何でもない・・・何でもないの。）

（何でもないわけないだろ！！朝はいつもどおり長かったのに！

・・・あいつらか・・・あいつらだな！？）

（誠ちゃん、やめてっ！）

（お前ら・・・いい加減にしろよ・・・！）

（あら、もう一人のガイジンさんのお出ましじゃない。

あの子の髪見た？もーチカチカしてウザかったからさあ、みんなのためとも思ってたカッとしてあげたんだよねー。

髪切ったらブスな顔も少しは見れるようになったんじゃない？でもあのキモい目じゃあ一生ブスかもね。ハハハ！

（ギャハハハハハ！）

ブチッ

その後のことは誠自身よく覚えていない。

当時の担任教師の話によると、女子生徒3人、男子生徒1人が骨折していたらしい。

詩音の髪の毛を切り落とした女子生徒にいたっては、頬骨、鼻骨、肋骨、を折る重傷だったようだ。

警察に補導された誠は、自分は当然のことをしたままで、あいつらは当然の報いを受けたのだと言い放ち、

反省の色がみえないと見た学校側と警察側は、誠を三ヶ月の自宅謹慎処分に課した。

学校側としては、暴行事件を起こした生徒をこのまま置いておくわけにはいかないと、誠を転校処分にする意向だったのだが、

詩音とその母親の必死な懇願により彼は転校処分を免れたのだった。

その事件以来、謹慎処分が解け学校に復帰した誠に対するイジメは、以前よりさらに陰湿にエスカレートした。

クラス内に留まらず、全学年から犯罪者扱いされ、誠の自宅にも嫌がらせの電話や手紙、落書きなどもされるようになった。

誠にとって唯一救いだったのはあれ以来詩音へのイジメがピタリとなくなったことだった。

恐らく、彼女へのイジメは最も誠の怒りを買うことを彼らはあの事件から学習したからだろう。

彼女は誠に救われ、誠もまた救われたのだ。

その後も誠への陰湿なイジメは続いたが、彼は耐え抜いた。そして、卒業した。

終わった やつと終わったんだ

しかしそんな3月に、悲劇は起きた。

（随分昔の事思い出しちゃったな。）

学校をあとにして、誠は満開の桜を見上げながらアパートへと続く坂を下っていた。

今の自分には桜の鮮やかな桃色がやけに眩しく見えた。

井坂詩音・・・か。

でも目が青いつてことはやっぱり変わってないね

彼女はどんなつもりであんなことを言っただろう。

他人の事を考えるのはひさしぶりだな、と彼は思った。

第4話 Blue Eyes

ポロロン ポロロン ジャラロン・・・

「ふう・・・」

誠は帰宅後、ジョニーウォーカーをロックで煽りながらクラシックギターを爪弾いていた。

今日はJONASANは定休日。休みの日は家で酒を飲みながらギターを弾いているのがほとんどだ。

彼は家で「ORCA」を弾くことはなかった。自分のアンプを持っていないし、アンプがあつたとしてもこんなボロい木造のアパートでエレキギターを掻き鳴らしたらどうなるかくらいは容易に想像できるからだ。

そう、彼の漆黒のエレクトリックギターは「ORCA」という。

ボディはかなり大きく、ネックも太い。ピックガードはメインはブラックだか少し暗めの赤色が縁取りしている。そしてブリッジには銀色に輝くビクスビーを搭載している。

全体的にGIBSONのES335に近いが、既存のモデルでは見られないデザインだ。

誠の唯一の相棒である。

「今日は気分が乗らないな・・・」

誠はラッキーストライクを一本取り出し、ジャックダニエルのロゴが描かれたジップポの石を回して火をつけた。

ふーっと白い息を吐く。

「学校、行きたくないな・・・」

彼の口から、白い煙と一緒にそんな言葉がでた。

「誠ちゃん、おはよう。」

翌日、誠は予鈴と同時に自分の席に着くと、既に着席して1限目の準備をしていた詩音から声を掛けられた。

「ああ・・・」

「眠そうね。相変わらず朝は弱いんだ？」

「わかってるなら話かけるな。」

詩音が悲しそうな顔をしている気がした。

彼女の顔を見たわけではないが、そんな気がした。

1限目があと10分で終わろうとしていたとき、誠の机の上に、詩音の真っ白な細い腕がノートの切れ端を残していった。

今日の放課後、学校の屋上に来て

ドン パン ドド パン

ボンボンボボボーンボボン

キューーン ギャアアア

軽音部の部室から、よれたリズムと不安定な音程が織り成す音楽が聞こえてくる。

どうやら邦楽ロックのコピーのようだが、最近の邦楽事情に疎い誠には何のバンドかはわからなかった。

彼は屋上に来ていた。

来ようか来ないかあれからずっと悩んでいたが、結局今に至っている。

暇つぶしに屋上から階下に広がる住宅街を眺めていると、後方で扉

の開く音がした。

「ごめんね、待たせちゃって。」

「別に。それで、何か用か。」

我ながらこれ以上ないくらいぶつきらばうだな、と彼は思った。

「うん……。」

か細く彼女が答え、しばしの沈黙のあと、意を決したように口を開いた。

「誠ちゃん、ごめんなさい。」

「は……？」

誠は虚を突かれたように目を丸くした。

「お前に謝られるようなことされた覚えはないんだけど……。」

てつきり彼女を避けている理由を問いただされるものと思い込んでいた誠は肩透かしを食らった気分だった。

「ううん。」

「小学校の時、誠ちゃん私を助けてくれたよね。誠ちゃんだけが私の味方をしてくれた。」

でもそのせいで、誠ちゃんは卒業までずっと酷いイジメにあった。

私のせいで……。

ずっと、誠ちゃんに謝りたかった。でもあんな悲しそうな誠ちゃんの顔を見てたら……怖くて言い出せなかったの。

私がイジメから解放されたのは、誠ちゃんのおかげなのに。

結局、卒業まで言えずじまいで、その後誠ちゃんはこの町を出て行ってしまった。

もう会えないのになって、謝ることもできないのになって、中学校に上がってからみずっと思ってた。

でも、今こうしてまた会えた。だから、今度こそ言うね。……ごめんなさい。」

誠は彼女を見つめた。吸い込まれるような、エメラルドグリーンの瞳が潤んでいるように見えた。この瞳に、涙は似合わないな、と思った。

「お前のせいじゃない。俺が勝手にブチ切れて、勝手にブン殴った。そんだけだ。」

誠は制服のズボンのポケットからラッキーストライクを取り出して口にくわえた。

「でも、俺は後悔していない。殴りに行った自分を褒めてやりたい。」

「誠ちゃん……。」

彼女の頬が濡れていた。

（結局泣かせちゃったな……）

「目が青いのは変わってないね……か」

「え……？」

今の誠には、彼女のあの時の気持ちがわかるような気がした。

「避けてて、悪かったな。」

彼女は彼を見上げた。

「これは、俺自身の問題なんだ。」

彼の思い詰めた悲しい瞳は、青かった。

第5話 何気ない一言

父さん！母さん！

カイ、オレたちずっとトモダチだよな

申し上げにくいことですが

カイ、今まで、楽しかったな

カイ、最高のギタリストになれよ

第5話 何気ない一言

夢・・・か。

午前3時40分。

誠は時間を確認してから、グレのカーテンを片方だけ開けて窓の外を覗いた。

まだ朝日は昇っていない。辺りは怖いくらいの静けさだった。

屋上での一件以来、誠にはいつも心に引っかかっていることがあった。

俺は自分から逃げている

悲劇の主人公を演じるつもりはさらさらない。

だが、心のどこかで自分の境遇を盾にしているのではないか。

自分が可愛そうなあまり、傷つくことを恐れ、自分自身と向き合うことを恐れているのではないか。

そんなことを自問自答する毎日だった。

もう忘れようと決めてたのにな・・・

誠は汗で濡れたパジャマを脱ぎ捨て、適当なＴシャツに着替えてタバコに火をつけた。

「誠ちゃん、今日家にご飯食べに来ない？」

昼休み、誠が購買から買ってきた卵入りのサンドイッチを食べていると、詩音が切り出した。

「なんだよ急に。」

「お母さんがね、誠ちゃんに会いたいつて。それにいつもろくなもの食べないんでしょ？」

「ろくなものじゃなくて悪かったな。今日はバイトだ。ていうか火曜日以外毎日バイトだ。」

「あつ、そつか・・・。バーでウェイターやってるんだっけ？」

「ああ。」

「じゃあバイトに行く前は？バーって夜からなんでしょう？」

「今日はセッションのある日だから事前に打ち合わせがあるんだ。だから無理だ。」

「セッションって音楽のセッション？」

「ああ。」

「凄い！誠ちゃん楽器できるの！？」

「声でかいっつの！」

「今の誠ちゃんの声が一番大きかったけど・・・でもちよつと見直しちゃった。」

あんな不器用な誠ちゃんが楽器弾けるなんて。りんごの皮も剥けない誠ちゃんが・・・」

「何でりんごの皮が出てくるんだよ。」

「ジャガイモの皮も剥けない誠ちゃんが・・・」

「皮から離れる。」

「ご飯も炊けない誠ちゃん……」

「喧嘩売ってんのか。それに米は炊けるようになったぞ。」

「え、ウソ!？」

ギロツ

「あ、ごめんごめん。それで、何の楽器やってるの?」

「ギター」

「へえええ。ギターって凄く難しいんでしょ?」

「楽器はどれも全部難しいさ。でも本当にその楽器のことが好きなら、どんなに難しくてもつらいとは思わなはずだけだな。俺も最初はFコードでつまずいたし、スウィープだって全然できなかった。でも諦めなかった。」

好きなものを諦める理由なんてないからな。ってこんな話しても詩音にはよくわからないか。」

「ううん。……誠ちゃん、何だか楽しそうね。」

「ん?」

「今凄く楽しそうな顔してたよ。」

「そうか? そんなことないぞ。」

「ふふ……。ねえ、今日誠ちゃんの働いてるバーに行ってみてもいい?」

「未成年はお断りだ。って普通に考えりゃわかるだろ。」

「そういう誠ちゃんだって思いつきり未成年でしょ。それなのにタバコなんか吸っちゃって。」

「俺は良いんだよ。マスターに許可もらってるんだから。それに未成年がタバコ吸っちゃダメなんて誰が決めた?」

「思いつきり国が決めてるんだけど……」

「それは国が決めたことであって俺が決めたことじゃない。俺は吸いたいから吸うと決めた。そんだけのことだ。」

「誠ちゃん、それ屁理屈……」

「他人からは屁理屈にみえても、俺の中では理屈が通ってる。だから

ら許される。」

「それが許されないのが法律でしょう・・・?」

「まあそういうわけで、諦める。」

「じゃあせめてバーの名前だけでも教えて?」

「ん、JONASAN」

こんなに他人と会話したのはいつ以来だろう。

普通の会話という行為が、誠には酷くなつかしいもののように感じられた。

誠はあれ以来、詩音を避けることをしなくなった。

そんなことをしても何の解決にもならない。

自分自身と向き合うことが怖くても、せめて彼女からは逃げ出さくない。

彼女のエメラルドグリーンの瞳から溢れた涙をみて、誠はそう思うようになった。

詩音の方も、誠が自分と向き合ってくれたことに喜び、積極的に彼と会話をもとうとした。

明朗快活で、時には冗談を言ったりする彼女に誠は驚いたが、この3年間で彼女は変わったのだらうと思った。いや、変わったのではない、これが彼女本来の姿なのだ。

4月20日 BLUES - BAR「JONASAN」

運命の歯車が、回り出そうとしていた。

第6話 BASS

「おつ、誠ちゃん久しぶり！」

「あつ、瀬野さん。」

「確か春から高校生になったんだよな。どうだ、花の高校生は？」

「別に、普通ですよ・・・。」

「女のケツばつか追っかけて、腕が鈍ったなんていうのはナシだぜ？
ワハハ！」

「はあ。」

第6話 BASS

JONAS ANの楽屋では本日21時から行われる誠たちのセッションの簡単な打ち合わせが行われていた。

メンバーは、誠とドラムスの瀬野、それと今日初めてJONAS ANのセッションに参加するベースの3人だ。

「じゃあ今日はいつもの3コードとジャズブルースやってみつか。」

「リズムパターンは？」

「うーん、最初はボトムリフ系のシャッフルでスタートしよう。オレが頃合い見ていつものフィル入れるからそのあとは16ビートでやってみようぜ。」

「了解。」

瀬野孝明

年齢は40代中盤といったところか。職業は大工をしているらしく、がっしりした体つきと捲くし立てるような口調が如実にそれを物語っている。

高校2年生のときLed Zeppelinのファンになってから、オールロック、ブルースのとりこになったらしい。

「ジョンボーナムのロールを聴いたときの衝撃はお前らにはわかんねえだろうなあ！」が彼の口癖でもあった。

プレイスタイルとしては、強靱なリストを利かせた鋭いリムショット、高速の16分ライド打ちが特徴的である。

瀬野は誠との初めてのセッションで彼のギタープレイに感銘を受け、それからマスターにできるだけ誠とセッションさせてくれるよう頼みこんだこともあった。

「ところでマスター、ベースストはまだ来ないのか？」

瀬野がのPearlの木胴スネアをセッティングしながら時計に目をやった。

「もうそろそろ来るはずなんですけどね。急用でもできたのかな。」

「

「それなら連絡ぐらい来るはずだろ。まったく打ち合わせつつうものをナメてんのか、近頃の若いモンは。」

「まあまあ、もう少し待ってみましようよ。」

「まったく……。」

瀬野とマスターがそんなやり取りをしているなか、誠はORCAのチューニングを行っていた。

彼はチューナーを使用しない。6本の弦すべての正確な音程を耳が記憶しているからだ。

チューナーを使わないことで音痩せを防げるし、足元にはMarshall JCM800のフットスイッチを置くだけでいい。

JONASANにはもう一台のギターアンプRolland JC120が置いてあるが、誠はこのアンプを使うことはなかった。

JCを使うとなると、どうしてもオーバードライブ系のエフェクターが必要となってくる。

誠はエフェクターを持っていないし、エフェクターの人工的に歪んだ音が好きじゃなかった。

また、誠は演奏中でも瞬時に小指でボリュームコントロールを操作できるよう訓練されているので、それによりギターソロにおけるブースターの役割をカバーしている。

ORCAにはエフェクターは必要ない。チューブアンプ本来の歪みこそ、ORCAの音を最大限まで引き出してくれる。

誠はチューニングを終えると、GRECOのシールドをあらかじめ真空管を温めておいたJCM800に差し込んだ。

ギユアアアアア！

「相変わらずスゲエ音しやがるな、そいつ。」

「時間あんまりないから、そろそろ・・・」

「へっ、OK！ 1・2・3・4！」

「おい、マスター！どうなってんだよ！！」

カウンターでジントニクを作っているマスターに、瀬野が顔を真っ赤にして問いただしていた。

「もう後5分でセッション始まっちゃうぞ！それに打ち合わせにも来てねえしよ！」

「私にもさっぱり・・・風邪でもひいて寝込んでるんでしょうか・・・」

「くそっ、ベースがないんじゃセッションにならねえよ！」

瀬野の言う通り、ベースは傍目からみると地味だが、バンドにおけるその役割、重要性はとてつもなく大きい。

特にドラムとベースをひつくるめて「リズム隊」と呼ばれるように、ドラマーにとっては、ベースサウンドはリズムキープだけではなく、グルーヴを感じる意味でも重要な存在なのだ。

「こうなったら私がやるしか・・・」

「え？マスターが？」

誠が驚いたように口にした。すぐに瀬野がそれに続く。

「マスターってベース弾くのいつ以来だ？」

「5年ぶりくらいですかねえ・・・」

「・・・」

誠と瀬野はそろって閉口した。

「無理か・・・」

瀬野が今日のセッションを諦めかけた時、JONASANの黒い扉が開いた。

第7話 First Impact

20時58分 JONASAN

「どうも遅れちゃいました。ベースの蘭堂です！」

ちよつと高めの声を発しながらJONASANに入ってきたのは、おそらく誠と同年代くらいであろう小柄な男だった。

髪は金色に近い茶色のメッシュが入った肩にかかるくらいの長さで、横にツンツンとはねている。

クリクリとした目が特徴的で、小動物のような顔にも見えた。

「てめえ、今何時だと思ってんだ！打ち合わせもしないでセッションやるつもりだったのか!？」

瀬野の怒号に、ほぼ満席の客の視線が誠たちに注がれた。

「いや」途中で道に迷っちゃって。店に連絡しようと思ったんですけど携帯の電池も切れちゃってて・・・」

「お前何時間道に迷ってたんだよ！」

「そんなに怒らないで下さいよ。こうして無事に到着できたんだから・・・まあ彼女のおかげなんすけどね。」

あまり反省の色が見えない蘭堂は、そう言つと彼の後ろに隠れるように立っていた若い女の子を指差した。

そこには見慣れた金色の長い髪とエメラルドグリーンの瞳があった。し、詩音!？」

第7話 First Impact

「何でお前がここにいるんだよ？」

「どうしても誠ちゃんのギター聴いてみたかったの。」

「未成年はお断りだつて言っただろうが。」

誠の口調が自然と強まる。

彼は客以外の知り合いに自分の演奏しているところを見られたくない

かったのだ。詩音なら尚更である。

「未成年？」

誠たちの会話を聞いていたマスターの眉がピクリと動く。

「そう、未成年。だからとつと追いついてくれよ、マスター。」

「誠くんの知り合いなのかい？その子。」

「彼とは高校の同級生です。」

井坂詩音です、と詩音は丁寧にお辞儀した。

「そうか、誠くんのお友達だったのか。」

「入れてあげてもいいんじゃないすか？オレも何ちゃって未成年だし。」

それにその子、オレをここまで道案内してくれたんすよ。」

「どういうことだ？」

未だ怒りおさまらぬ様子の瀬野が怪訝な顔で詩音と蘭堂の顔を交互に見つめた。

「えっと、彼にお茶しない？って聞かれたので、用事があるって答えたんす。」

そうしたら、どこ行くの？って聞かれたから、JONASANについて。」

「テンメエ！！打ち合わせサボってナンパしてたのか！！！」

「ち、違うんすよ！！散々道に迷ってたら可愛い女の子いっぱい見つけちゃって、それでつい時間も忘れて声かけてたら……って怒ってる……？お、怒ってるよね？……あ、ボク楽屋に用事あったんだ！それじゃあね、オジサマ！」

「誰がオジサマだ！待てコノヤロウ！」

「うわあ！ゴメンナサイ！！！」

バカ正直の詩音に暴露されたおかげで、完全に瀬野の怒りを買ってしまった蘭堂は奥にある楽屋まで逃げていった。

「お願いします！お酒もタバコも飲みませんから！」

「バカ、客が酒飲まなかったら商売にならないだろ。」

「あっ……」

「というわけで諦めて帰れ。」

「・・・わかった。いいよ。」

「「えっ・・・？」」

誠と詩音の声が綺麗なハーモニーを奏でた。

「誠くんのお友達なら仕方がない。ただし、お酒とタバコは出せないがね。」

詩音の瞳がよりいっそう輝きを増した。

「あ、ありがとうございます！」

「っていうわけなんすよ。いや〜でもあの子に声かけて正解だったね。まさかJONASANに行こうとしてたとはね。」

まあ、お茶はできなかったけど。いや待てよ。セッション終わってからでもチャンスはなくてもないぞ。

キャ〜！蘭堂さんのベース超〜イカしてました〜！！今度はワタシをイカせて〜！みたいな。ムフフ、ムフフフ・・・！

「おい、お前マイク入ってるぞ・・・」

「えっ？」

方向音痴とナンパで打ち合わせをスッポかしたことをネタにMCを披露していた蘭堂は、無意識にしていた妄想もMCされていたことを誠に気付かされた。

詩音を含むJONASANの客全員の啞然とした表情が痛々しい。

「ア、アハッ！アハハハハッ！！嫌だな、冗談ですよ！冗談！！いわゆるブラックユーモアってやつ！」

「只の下ネタだろうがバカ！！」

半袖のTシャツとハーフパンツに着替え、準備万端といった様子の瀬野が一喝する。

「小僧！最初はシャッフルで行くぞ。ってかシャッフルって意味わかってんだろっな？」

「おっさん、オレをナメた発言したこと後悔するよ？」

蘭堂はそう言うときFenderの黒いプレベッションベースを腰の

位置に構えた。

「キーは？」

「Eだ。16ビートになってからはAに変調する。タムのロールが合図だ。」

「あいよ。」

「オラ、二人とも行くぞ！イントロの12小節は誠のソロだからな！」

「ちよつ、そういうこと今ごろ言う！？」

「打ち合わせの最中にナンパしてたヤツが文句言っんじゃないよ、いくぞ！！」

瀬野はハイハットをハーフオープンにしてカウントを始めた。

シャン！シャン！シャン！シャン！！

ギユアアアア！！

蘭堂のボトムリフをバックに誠のギターソロがJONASANの空気を切り裂いた。

（なんだ！？コイツ！？）

トゥルルトゥルルトゥルルキュイイイ~~~~ン！！

マイナーペインタニックスケールにブルーノートを散りばめた下降3連フレーズを1音半上げチョーキングヴィブラートで彩る。

（凄えなんてもんじゃないやねえぞ・・・！ってか何だあのギター！？何てぶつとい音してやがるんだ！？）

蘭堂は誠のギターに度肝を抜かされていた。

ピッチの正確さ、カッティングのキレ、フィンガリング。全てがこれまで出会ってきたギタリストとはケタが違っていた。

そしてボディーブローのように腹に伝わってくるORCAの音の壁に、彼は恐怖した。

（泣いてる・・・ギターが泣いてるんだ・・・）

蘭堂がギタリストに圧倒されるのは初めての経験だった。

彼がベースを手にとったのは4年前、小学校6年生のときだった。もともと手先が器用で、もの覚えも早かった彼はみるみるうちに上達し、3年後には中学校の文化祭でM R B I Gのコピーバンドを組んでビリー・シーンばりの両手タッピングを披露し、その場にいる全員を驚嘆させたこともあった。

そんな彼にはこれまで数多なバンドから誘いがあったが、彼らとは心から自分を表現できる音楽を創り出せることはできなかった。

その蘭堂を圧倒している男が、目の前にいるのだ。

ふと蘭堂は自分の膝が震えていることに気づいた。

それは、生まれてはじめての武者震いだった。

第8話 駆け引き

4月20日

JONASANはかつて無い熱気に包まれたいた。

その空気を創り出しているのはまぎれもなく誠のギターだった。

客は酒を飲むことを忘れたようにステージの上の彼に見入っている。そんな中、ステージから一番近い席で祈るように両手を胸の前で組んで見ていた詩音は胸が熱くなるのを抑えられなくなっていた。

（誠ちゃん、すごい・・・！すごいよ・・・！）

誠はネックを抱きかかえるようにしてORCAを立たせて、弦が切れるのではないかと思うほどの強いピッキングをしていた。

（今日の誠はいつにも増してすげえ・・・。）

ハイハットをフットクローズさせながら、瀬野は誠の背中を見つめていた。

（今日のあいつを引き出してるのは・・・）

第8話 駆け引き

誠は今までにない不思議な高揚感を感じていた。

（何だろう、この感覚・・・）

まるで踊るように軽快にハネているベースのことがふと頭に浮かんだ。

キイイイン！、と脳天に突き刺さるような鋭いピッキングハーモニクスが響き渡る。

（相棒、おまえ、喜んでるのか・・・？）

ORCAの漆黒の光沢が、いつもより光輝いているように見える。ドウルル ドウドウルル ドドドドウルル！

瀬野のタムタムとフロアタムを使ったロールが始まった。

（合図か。）

誠がフットスイッチをクリーンに切り替え、A7コードのカッティングに入ろうとした時、蘭堂が大股に足を広げ、上体を低く構えたのが目に入った。

バキッ！ボボンッ！ボボンボン！バキバキツウルルルル！

（（なっ！？））

誠と瀬野はあやうく曲を止めてしまうところだった。

（何だ！？スラップにタツピング！？）

（あのガキ、すげえぞ！？）

瀬野のお得意の高速ライド16分打ちに合わせた、ファンクかと思わせるような激しいスラッピングに高速のタツピングを交えた蘭堂のプレイは、JONAS ANの空気を一変させるには十分なものだった。

（あのガキ、誠を食うつもりか！？）

それまで誠の力強く、どこか温かく包まれるようなギターに酔いしれていた客の視線が一気に蘭堂に集まった。

（さあ、どう出るよ？）

誠は先ほどの何ともいえない高揚感の所以を理解しつつあった。

（こいつのベースが俺のギターを生かしてくれていたんだ・・・。）

この男は自らのテクニクを見せ付けることで自分を食おうとしているのではない、と誠は思った。

蘭堂は俺を試している

根拠はなかったが、誠にはそんな気がした。

そして彼は次取るべき行動について考えていた。

（自分の支えとなるものがなくなったら・・・か。）

ふと目の前の詩音の顔が目に入った。彼女は誠の瞳を真っ直ぐに見

つめていた。

ブルーとエメラルドグリーンの視線が交錯する。

（詩音・・・）

誠は漆黒の相棒に目をやった。

答えを待っているように誠には思えた。

最高のギタリストになれよ

アイツの最後の言葉だった。

答えが見つかった気がした。

相棒

誠はORCAのポリウムコントロールを0に絞った。

バキッ！ボババキッボン！バキバキッボボバキットゥルル！！

（誠！？どうした！？）

（へえ・・・。）

JONASANには瀬野のハイハットの刻みと、蘭堂の超絶スラップが鳴り響いた。

俺には、支えなんかいらぬ

誠はフットスイッチを踏むと同時に、0にしたポリウムコントロールを一気に全開させた。

ギユアアアア！！

（（ユ、ユニゾン！？））

誠は蘭堂のベースのスラップ音を右手でボディと弦をを叩くことで表現し、高速のタッピングも完全にユニゾンさせてみせた。
（へっ、それがおまえの出した答えか・・・）

音楽で会話ができたのは初めてだな、と蘭堂は思った。

第9話 揺れる思い

「ジッ・・・」

ラッキーストライクに火をつけたジッポの小さな炎が、薄暗い楽屋に光を灯した。

「ふう。」

誠はなんとも言えない脱力感に襲われていた。

（こんなに疲れたセッションは初めてだ・・・）

彼はギタースタンドに立てかけてあるORCAに目をやった。

「相棒・・・俺はあれで良かったんだよな・・・？」

第9話 揺れる思い

「誠ちゃん、すっごい上手だった！私感動しちゃった。」

興奮した表情で詩音が楽屋から戻った誠に声をかけた。

「別に・・・そうでもない。」

誠は無意識に詩音から目をそらした。

「どうしたの？具合でも悪いの？」

詩音の表情が途端に暗くなった。

自分のことには鈍感なくせに他人には敏感なやつだな、と誠は思った。

「別に、なんともない。ちょっと疲れただけだ。」

そう言うとき誠はカウンターに戻り、流し台で皿を洗い始めた。

「ハ・・・イ、詩音ちゃん！」

「あ、えつと蘭堂さん、でしたっけ。」

「ワッオ！名前覚えてくれたんだ！もうボク感激！！」

「え、ええ・・・。」

「ね、ボクのベースどうだった！？もう、それはそれはメロメロに

溶けちゃうようなプレイだったろ!?

ボクのROCKでキミのハートをLOCK ON!! なくんちゃつて! アハ、アハハハ!

「ハ、ハハ・・・。」

「ところでどう、この後ボクと一緒に街にでも繰り出さない!? オレ、イイところ知ってるんだ!」

「あ、でも・・・。」

詩音はチラッとカウンターの誠の方を見たが、洗い物をしている彼はその目線には気づいていないようだった。

「知り合ったばかりだからって遠慮することないって! ボクが優しくリードしてあげるからさ!」

「あ、でも今日は・・・。」

「実を言うとボク、キミを一目見た瞬間にビビッと来ちゃったんだよね、もうビビッと!」

「・・・あ、なにもしかしてキミもオレにビビッと来ちゃったとか!?! いや参ったコリヤ! これが運命の出会いってやつ!?!」

「あ、あの・・・。」

「よし、そうとわかればもう迷う必要なんてないよ、詩音ちゃん! ボクたちが出会ったのは運命なんだよ!

そうさ! ボクたちは運命という赤い糸で繋がってるんだ! さあ、行こう! 未来がボくら2人を待っている!」

「あつ」

詩音は蘭堂に腕を掴まれて小さな悲鳴をあげた。

「おい。」

誠は洗い物の手を止めた。

「ん、何だよ? ボクらのサクセスラブストーリーを邪魔しないでもらいたいのだが。」

「いいこと教えてやろうか。お前も後ろからLOCK ONされるぞ。」

「え? そんな、参ったなあ! 同時に二人の女性を虜にしてしまうな

んてボクはなんて罪深い男なんだ・・・！！

でもごめんよ・・・ボクには詩音ちゃんという運命の人が・・・」

蘭堂がそんなことを言いながら後ろを振り返ると、そこにはとてもだが女性とは形容し難い顔があった。

「小僧・・・どこへ行く？」

「オ、オジサマ！！？」

天国から地獄に落とされた蘭堂の顔がみるみる引きつっていく。

「ナンパに夢中で大遅刻しといて、性懲りもなくまたナンパとはい度胸してるじゃねえか。え？」

「い、イヤ、こ、これはナンパなんかじゃなくてね！、いわゆる健全な男女による愛の語らい・・・」

「って怒ってる・・・？ねえ怒ってるよね！？」

「安心しな、小僧。オレはこう見えて寛大で面倒見がいいことで有名なんだ。」

今夜はこのオレがお前に社会のルールってやつを手取り足取り一から教えてやるよ。お前も嬉しいだろう？ええ？」

「あ！社会！そくだボク明日提出の社会の宿題あったんだ！そくだそくだすっかり忘れてた！

こうしちゃいられない、早く帰って宿題やらなきゃね！じゃあねオジサマ！」

「待ちやがれコノヤロウ！！」

蘭堂はカウンターの椅子に立てかけておいたFenderのベースを担ぐと一目散に退散していった。

「クソッ、なんて逃げ足の速えヤロウだ・・・。」

瀬野は悔しげにそうつぶやくと、カウンターの席に着きブラックニッスをストレートで煽った。

「誠くん、今日はもう上がりなさい。」

食器洗いを再会していた誠にマスターが言った。

「え？まだ閉店まで1時間半近くあるでしょ。」

「こんな物騒な世の中、彼女をこんな時間に1人で帰らせるつもりかい？」

「？」

誠がマスターの視線の先に目やると、そこには店内の壁に貼られたビートルズのポスターを興味深げに眺めている詩音の姿があった。

「あいつ・・・まだ帰ってなかったのか・・・。」

「君のことを待っているんだろう。あの調子じゃあ閉店まで帰らないと思うよ。」

マスターが穏やかな笑みを浮かべて誠の手の中の食器を取り上げた。

「友達は大事にしなさい。あ、それとも彼女だったかな？」

「マスター！」

「ハハ、冗談だ。さ、行きなさい。」

マスターは一見温和そうで事実温和ではあるが、一度自分が言い出したことは引かない頑固な一面もあった。

誠は仕方ない、といった顔で手についた洗剤を洗い流し、詩音の方へと足を向けた。

「詩音、帰るぞ。」

「あ、誠ちゃん。もうバイト終わったの？」

「ああ。」

誠はマスターに送っていけと言われたから、とは言わなかった。

誠がそうしたのは、詩音がその事を知れば彼女の性格上、自分を責め、誠やマスターに申し訳ない気持ちになるだろうと思ったからだ。

「誠くん。」

誠がORCAを手に取り詩音と並んで店の扉を開こうとした時、マスターが誠を呼び止めた。

「今日は、君にとってもJONASANにとっても忘れられない日になるよ。」

「それにしても誠ちゃんがあんなにギター上手だなんて、本当にビツクリした。」

誠と詩音はわずかな街頭が照らすだけの暗く細い道を歩いていった。まるで人が世界から消えたみたいだな、と誠は思っていた。

「別に・・・」

「ううん。私バンドのこととか良くわからないけど、誠ちゃんを見てギターって素敵な楽器だなんて思ったもの。」

「おだてたって何も出てこないぞ。」

「もう、お世辞なんかじゃないってば！」

「わかったわかった。」

「ベースの人に合わせて一緒に同じメロディ弾いてるところあったでしょ？あそこなんか皆ビツクリしてたと思うなあ。」

あ、そういえばあの人も上手だったね。なんだか変わった人だったけど・・・」

蘭堂・・・

誠は先ほどの蘭堂とのセッションのこと思い出していた。

支えなんかいらない

（俺は間違っ てない。俺は一人で生きていくんだ。一人で・・・）
ふと誠は隣の詩音に目を向けた。すべてを受け入れてくれそうな、穏やかな瞳があった。

その瞳に優しく包まれそんな感覚に陥った彼は、心の中で首をふつた。

（もう、あんな思いはしたくないんだ。支えなんて・・・俺は・・・）

誠は自分の出した答えに自信を持ってない自分が齒痒かった。

「誠ちゃん、大丈夫？」

「えっ？」

「やっぱり具合悪そうよ？顔色も悪いし。」

「いや、大丈夫だ。疲れてるだけだ。」

「本当に疲れてるだけ？」

「ああ。」

「それなら良いけど……。」

しばらくして小さな十字路に出ると、詩音が切り出した。

「じゃあ誠ちゃん、私の家こっちだから。」

「送ってく。」

「え？」

詩音が目を丸くした。誠の口からそんな言葉が出るとは予期していないような反応だった。

「悪いからいいわよ。それに誠ちゃん疲れてるんでしょう？早く帰って休まなきゃ。」

「いいから、行くぞ。」

誠はぶっきらぼうに言つと左手をポケットに手をつ突っ込んで歩き出した。

「誠ちゃん……。」

二人の瞳が、暗闇の中で綺麗な輝きを湛えていた。

第10話 敵

「誠ちゃんサンドイッチ買って来たよ。」

「ああ、サンキュ。」

「それにしても毎日サンドイッチでよく飽きないね。」

「これが一番安くて腹にたまるからな。飽きる飽きないの問題じゃない。」

「ふうん。ね、私がお弁当作ってきてあげようか？」

「は？」

「だってサンドイッチだけなら栄養つかないでしょ。」

「人の身体の心配する前に自分の心配したらどうだ？お前こそそんな小さい弁当で足りてるのかよ？」

「私は小食だからこれで足りるの。そういうことで明日から作ってきてあげる。」

「何がそういうことでだよ。余計なことするなよ。」

「どうして？あ、もしかして味の心配してるの？」

大丈夫、こう見えても中学生の頃から自分で毎日お弁当作ってるんだから心配しないでよ。」

「いやそうじゃなくてだな・・・」

「明日のおかず何がいい？そうだ、誠ちゃん生姜焼き好きだったよね。じゃあ明日は生姜焼きにしよう、そうだそうだそうしよう。」

「人の話をきけ・・・」

第10話 敵

蘭堂とのセッションから一夜明け、誠と詩音は学校の教室で昼食を食べながら他愛も無い会話をしていた。

C組の教室には、弁当や購買のパンを食べながら昨日のテレビ番組

や雑誌の話をしている生徒の声が響いている。

耳障りな音だ、と誠はいつも思っていた。

「一之瀬、ちょっと顔かせよ。」

弁当を作つて来ようとする詩音を何とか説得して一息ついていた誠は、聞き覚えのない声に自然と顔を強張らせた。

声の方に体を向けると、誠の前には背の低い茶色に髪を染めた男が立っていた。

「何か用か？」

「用が無かったらテメーに話しかけるやつなんていねーよ。いいからちよつと来いや。」

「用があるならここで言え。」

男の喧嘩腰の態度に、誠は冷めた表情で答えた。

「ハア？テメー喧嘩売ってんのか？つーか何ガンとばしてんだよ。マジしばかれてーのかよ？」

誠はチラッと隣の詩音の顔を見た。口調を荒げた男におびえているのがすぐにわかった。

（仕方ないな・・・）

「随分とたいそうな用があるみたいだな。」

誠は人気の無い校舎裏へと案内され、そこで5人ほどの男に囲まれていた。

「余裕かましてんじゃねーよ。びびってんだろ、テメー？」

先ほどの男が下品な笑みを浮かべている。

「で、何の用だ？せつかくの昼休みを無駄にしたくないんだけだな。」

誠はラッキーストライクを取り出して火をつけると、一つ大きな白い煙を吐き出した。

「テメー調子こいてタバコ吸ってんじゃねーぞ。おい三森、こいつしばいちまおうぜ。」

「まあ落ち着けて佑介。」

三森と呼ばれた男はそう男をなだめながら誠の前に立った。身長は誠と同じくらいか、少し高いくらいでモデルのようなスラッとした体型だ。

女子生徒に人気のありそうな甘い顔立ちをしている。

誠はこの男の目に酷く嫌悪感を覚えた。

「とりあえず、誰だお前？」

誠は至極かつたるそうに口を開いた。

「へえ、C組でオレのことを知らないやつがいるとはな。お前と同じ組の三森翔太だ。」

「悪いが知らなかったな。」

「まあいい。そのうちいやでもオレのことを覚えることになるさ。」
「話はそれだけか？」

「ふつ、そんなにせかすなよ。ちょっとお前に聞きたいことがあつてな。井坂詩音のことだ。」

「詩音？」

誠の眉がピクリと動いた。

「お前、随分と井坂と親しそうじゃないか。他の生徒とは全く口もきかないくせに。」

それに昨日の夜、オレのダチがお前たちが一緒に住宅街を歩いているのを目撃している。」

まずったな、と誠は心の中で舌打ちした。

誠は詩音との関係を隠すかどうか一瞬迷ったが、この先を考えるとそれを隠すのは良策とは思えなかった。

「それがお前と何の関係がある？」

「大アリなんだよ。オレはな、入学式の時から井坂を狙ってたんだよ。それをお前みたいな根暗に邪魔されてるわけだ。」

「お前の邪魔をした覚えはないんだけどな。」

「結果的にお前が邪魔になってるんだよ。そういう訳で、今後井坂には近づくな。わかったな。」

ふーっと大きく溜息をついた誠は煙草を携帯灰皿の中でもみ消した。
「なにか勘違いしてるようだから言うておくが、俺と詩音はお前が
思っているようなものじゃない。ただの幼馴染だ。」

「幼馴染？」

三森は眉間にシワをよせた。

「なるほどな、それは驚いたな。お前みたいな何も脳のないヤツが
井坂と親しくなれるのが不思議でたまらなかったが、そういうこと
だったのか。」

「お前は人を見下していないと気がすまないのか？」

誠の青い眼光がキツと鋭くなる。

「チツ、気に入らねえ目だな。」

三森はペツと唾を吐き出した。

「まあ見てろ。オレは絶対に井坂を落とす。このルックスとギター
でな。」

「ギター？」

あまりに意外な単語が三森の口から出てきたので、誠は目を丸くし
た。

「お前、知らねーのかよ。三森は中学のころからバンドでギターや
つてんだ。この学校の軽音部でも群を抜いてスゲーって有名なんだ
よバーカ。」

佑介というらしい男が口をはさんだ。

「知らないな。興味ない。」

「ふっ、お前には縁のない話だ。来月オレたちのバンドがDIOで
ライブをやる。そこで井坂を落とす。」

三森は不適な笑みを浮かべた。それは、誠が今までに幾度と見てき
た偽善者の目だった。

誠はふっと口元をゆるめてつぶやいた。

「お前には無理だ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3352d/>

ORCA

2010年10月9日03時59分発行